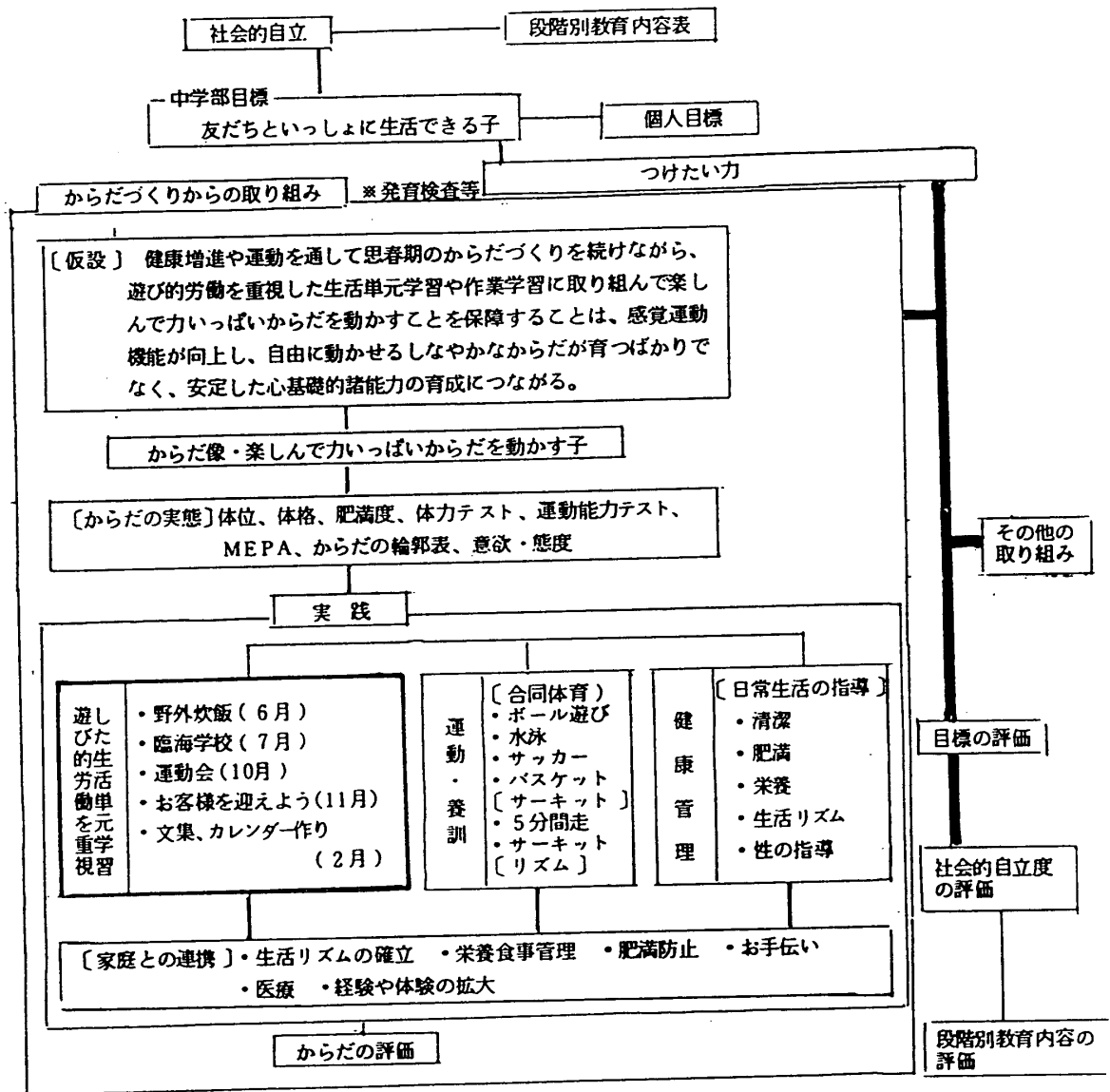


力いっぱい

- 汗をかき、筋肉を使った粗大運動、神経を集中している微細運動。
- 机上の仕事での創意工夫し、集中、持続といった精神面も含める。

(4) 研究の構想図

以上、本年度の取り組みを述べた。下記の図6は、それを構想図で示したものである。



(5) 生徒の実態

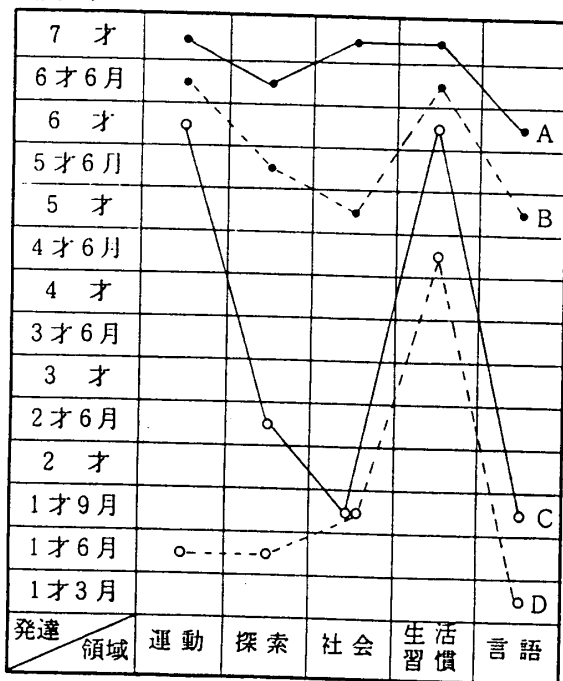
指導を展開するに当たり、色々な実態調査をした。各々の目的については各調査の項で述べるが、実態調査は次に述べる考えで実施し、指導に生かそうとしたものである。

- 指導前と指導後と比較するための基礎資料とする。
- 調査結果を指導に生かす。その際、落ち込みに目を向けるばかりでなく、むしろ得意とする面

に目を向けて落ち込みをカバーしたり、引き上げたりする指導に目を向けるように心がける。結果は学部全体の立場で処理し、学部の傾向や留意点を探ると同時に、個人の内容をしっかりと読み取って、指導の手立てや留意事項を引き出す理論的な背景として生かす。

(1) 津守式乳幼児発達診断 (H. 1. 4)

〔図7〕

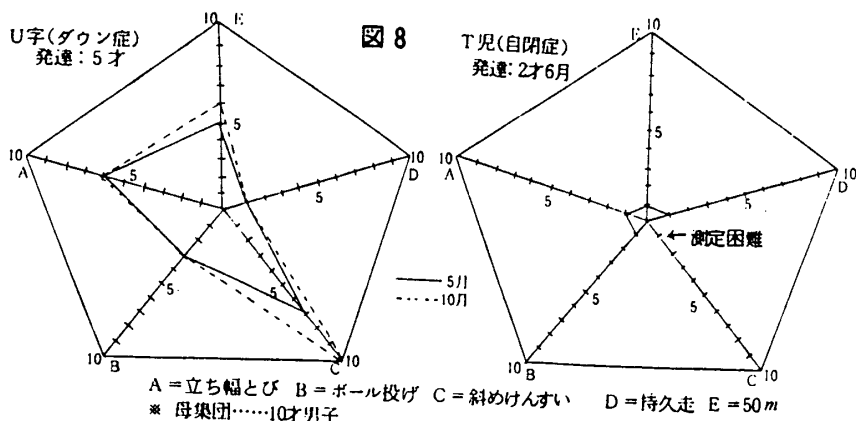


〔目的〕 発達年令、領域のプロフィール等の様子を知り、その特徴的な心理・行動特性を指導内容、課題、グループ編成等の参考にする。

〔結果〕 ● 左の図7に示す特徴的な4名のタイプ(A……4名、B……7名、C……5名、D……4名)で代表される。

- 能力差が大きい グループ作り、複数課題に配慮し、能力の低い子に目を向けていくこと。
- 層化現象(個人の領域間のアスペランス)が見られる。高い方に目をつけるか、低い方の手当てをするか、個人によって見極めが大切である。
- 運動、生活習慣の高さは、年令効果と考える。からだを動かすという取り組みやすい分野から社会性や言語を育てていく方向が考えられる。
- 障害の重い子の指導法の追求が課題である。

(2) 運動能力テスト (H. 1. 5月と10月)



〔目的〕 運動能力の変容をとらえ、からだづくりの運動能力からの効果を探る。

〔結果〕 ● 左の図8は中学部の代表的な2つのタイプを示したものである。

● 全国平均からの逸脱は大きい、個人内の変容を

捉える事はできる。しかし、場を設定したテストは中々本来の力が発揮できない欠点があり、特に自閉的傾向のT児のような生徒にとっては、テストや比較処理が困難な場合が多い。

- からだづくりの一つの指標にはなるが、我々のめざすからだを捉える事はやや難しい。

(3) ムーブメント教育プログラムアセスメント (MEPA) (H. 1. 5月と10月)

〔目的〕 ムーブメント教育の達成課題は、我々のめざしているからだづくりと共通した面が多い。この達成課題をチェックし、運動技能、身体意識や心理的諸機能の発達の様子を捉え、指

導の手がかりを得る。また、指導後の変容を捉えるスケールする。(詳細はp.15 参照)

【図9】 MEPA プロフィール表

年齢	月	4		10		4		10		4		10	
		1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
7	61-72	28	28	28	28	26	26	26	26	28	28	28	28
6	49-60	27	27	27	27	25	25	25	25	27	27	27	27
5	37-48	26	26	26	26	24	24	24	24	26	26	26	26
4	19-36	23	23	23	23	21	21	21	21	23	23	23	23
		22	22	22	22	20	20	20	20	22	22	22	22
3	13-18	19	19	19	19	17	17	17	17	19	19	19	19
		18	18	18	18	16	16	16	16	18	18	18	18
2	7-12	17	17	17	17	15	15	15	15	17	17	17	17
		16	16	16	16	14	14	14	14	16	16	16	16
1	0-6	15	15	15	15	13	13	13	13	15	15	15	15
		14	14	14	14	12	12	12	12	14	14	14	14

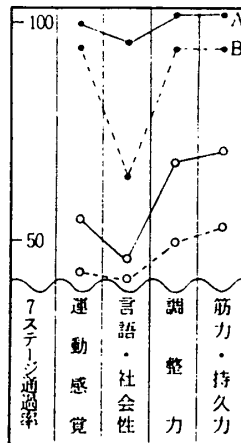
ステージ	月	年齢	分野	姿勢		移動		技巧		受容		表出		対人関係	
				1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
				運動・感覚				言語				社会性			

【結果】・左の図9は、中学部生徒20名の各項目の通過

率を示したもので、■は15/20人(75%)の通過率、▨は12/20人(60%)の通過率を示している。

- 言語、社会性の4ステージ、運動・感覚の5ステージをクリアしながら6ステージをめざす必要がある。
- 下の図10は、第7ステージの各分野の通過率を示したものである。A~Dと能力差は大きい。
- 代表されるA~D4名のいずれも、言語、社会性に

【図10】



劣っている。生活単元学習の場でからだを使いながら、行動にことばで裏打ちをしたり、仲間と関わる中でこの分野の力を育てていきたい。

- 「つま先で歩く」が出来なくても「補助輪付きの自転車に乗れる」の例の様に、必ずしも順序を追う物でもない。実用的な

からだのこなしについては、この面をできれば期待していきたい。

(4) からだの輪郭表 (H. 1. 5月, 10月)(詳細はp.14を参照)

【目的】 日常活動としてからだがどの程度使えるかを調査し、学習の組み立ての参考にしたり、変容を捉えたりするため、諸発達検査、文献、段階別教育内容表等から内容を選定し、本校独自に作成し、試行しているものである。

【結果】・右の図11は、中学部生徒20名の各項目の通過率を示したもので、■は15/20人(75%)の通過率、▨は12/20人(60%)の通過率を示している。

- 「手首の関節を動かして書く」(機能訓練不足)、「ひもを結んだりほいたりする」(経験不足)、「お茶碗を持って食べる」(指導不足)等、色々な原因で積み残した内容が多くある。4~5才の内容をしっかり身につけながら5~6才をめざしていきたい。

【図11】 からだの輪郭表 (・印は10月に変容した項目)

	0-1	1-2	2-3	3-4	4-5	5-6	6-7	7-8	8-9	9-10
手指の機能	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
・探索・道具の操作	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
・着脱・衣服	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
・食事・調理	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
・言語	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
・遊び・遊具	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
・運動	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
・音楽・リズム	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

・遊びや運動が他の領域より優れている。この力に依拠しながら、手指の機能や道具の操作をはじめ、言語の力を引き上げていくような学習の組み立て、展開を心がけていく必要がある。

(5) 意欲、態度 (H. 1. 5)

〔表1〕意欲・態度の具体例

〔目的〕 我々がめざすからだづくりの中核には、意欲、態度がある。右の表1は、その実態を記述方式で調査したものの一部である。

〔結果〕 ・年度始めという事もあって、調査結果からも、学部の雰囲気からも「何をしたいかろう

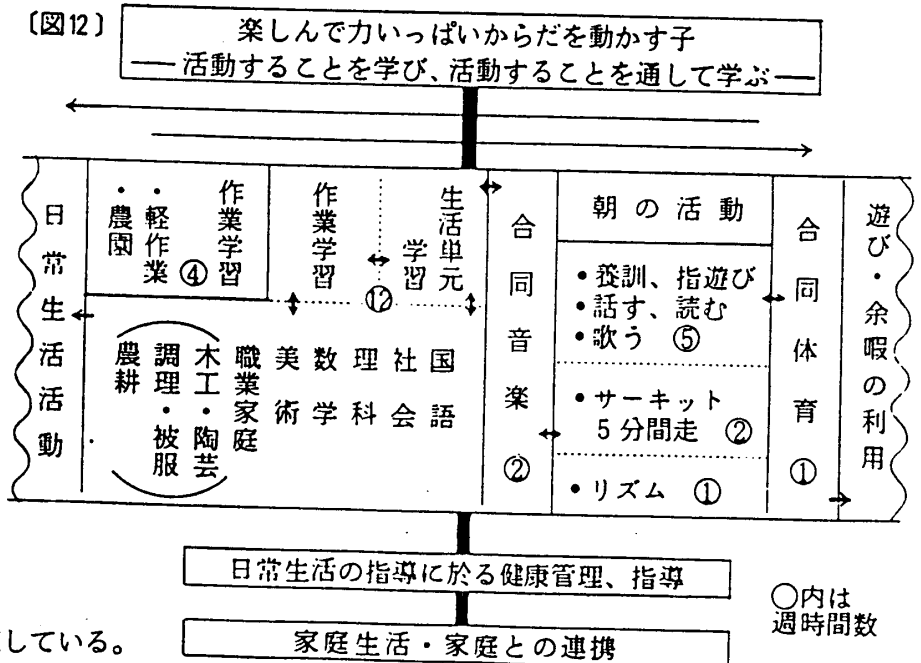
〔興味・関心〕 ・援助されて興味を持つ ・関心はあるが表現しない ・興味を持つが持続しない ・得意な事なら興味を示す ・特定の事に興味を示す	〔積極性〕 ・一つ一つ指示を待つ ・自分からは中々取り組みない。自信がない ・ごく限られた身近な事だけ進んで取り組む	〔集団参加・協力〕 ・やっと友達と一緒にいる ・すぐいなくなる ・わざと協力をさける ・先生の指示で協力する ・組の友達となら協力する
〔目的意識・やる気〕 ・何をしたいかわからない ・目的を問うが答えられない、話題にならない ・取り組む内に少しずつ目的意識がわいてくる	〔集中・持続〕 ・すぐ「もういい」と言う ・かなりのはげまし、援助で持続させる。(20分) ・好きな事なら、集中・持続する。(40分)	〔安定・自制〕 ・常同行動が多く見られる ・自己主張、勝手な行動がある。すぐすねる ・自信のある事なら安定して取り組む

うろしている」、「先生にさせられるのをじっと待つ」「自分の思いや考えを中々言えない」等、意欲、態度面での盛り上がりは少なく、この面への取り組みの必要性を感じる。

以上、(1)~(5)の調査を参考に、全員に個人目標を設定し、全体と個に目を向けながら取り組んだ。

〔6〕 生活の組み立て

右の図12は、「楽しんで力いっぱいからだを動かす子」をめざした各指導形態の位置づけ及びその相互のかかわり、週時間数を示したものである。生活リズムの確立という点から考え、朝の活動(体育を含む)は、1・2校時の帯時間を設定している。



各教科、領域、指導形態間の合科・統合の比率は単元によって異なるが、本年度はからだづくりの場を生活単元学習に広げたため、学校生活に大きな軸ができ、いろいろな活動がその軸に統合されたり、軸から発展して展開されたため、合科・統合の比率は平均75~85%の高率を示している。以下、これ等の具体的実践について、遊び的労働を重視した生活単元学習を中心に述べてみたい。